

## バーミヤーン遺跡・建造物調査

文化財研究所は2003年よりバーミヤーン遺跡保存のための調査団を派遣しており、これまでの考古遺跡調査、壁画調査に加え、2005年11月には建造物班も調査に参加しました。建造物班では今回の調査を今後の本格的な調査のための予備調査と位置付け、はじめの2日半でバーミヤーン谷及びフォラーディー谷の石窟寺院を概観するとともに、伝統的建造物の視察をおこないました。後半の2日半はバーミヤーン谷所在の約20窟の石窟寺院を巡り、その建築的要素の把握と破損状況を調査しました。

ところで、日本の木造建築と構造・構法がまったく異なる調査対象のため、不安を感じながら現地入りしましたが、伝統的建造物の視察で当地の建築技法が良く理解でき、これが石窟寺院の成形技法の解読に役立ちました。このことは、古代の石窟成形技術が、近代以降の建築技術まで伝統として受け継がれていることを示しているように思います。

さて、石窟寺院が穿たれている岩崖は大崩壊を見せ、同崖上からは土砂が絶えず落下しています。同遺跡の保存対策が容易でないことを痛感した第1回目の現地調査でした。（文化遺産研究部 窪寺 茂）



カラと呼ばれる住居建築内部  
カラと呼ばれる住居建築内部



石窟寺院が穿たれているバーミヤーン谷岩崖

## 全国木簡出土遺跡・報告書データベースの公開

昨年10月、奈文研では木簡に関する3つめのデータベース「全国木簡出土遺跡・報告書データベース」のホームページ上での公開をはじめました。

(<http://mokuren.nabunken.jp/NCPMKR/Mkn-Iseki.html>)

このデータベースは、全国の木簡出土遺跡とその報告書等の文献リストを集成したもので、埋蔵文化財ニュース114号『全国木簡出土遺跡・報告書総覧』（2004年2月。以下、『総覧』）をもとにしています。公開段階のデータ数は、1,023遺跡、321,856点に及び、冊子版刊行から1万点余の情報が加わりました。データベースの内容は随時増補しており、公開データも年に数回更新する予定です。

史料調査室は、各地の調査機関の依頼をうけ、全国の遺跡から出土する木簡の釈読に協力してきました。また、奈文研内に事務局をおく木簡の調査・研究・保存を目的とした木簡学会とも協力しながら、全国の木簡出土情報の蒐集をおこなっています。それらの出土情報や釈文は、毎年11月に刊行される学術雑誌『木簡研究』（木簡学会編集）に、前年出土の木簡として掲載するほか、学会からデータの提供を受け、奈文研の木簡データベースで公開してきました。ただ、報告書等の刊行に際し、釈文の訂正を含めた新たな知見が示されることも多く、速報以後の調査研究成果の整理と蒐集が求められていました。『総覧』はそれに応える刊行物であり、今回のデータベース公開により、木簡出土情報や扱るべき報告書等の最新情報を、より簡便に検索し利用できるようになりました。

ともすれば業務の効率化・再編・縮小ばかりが評価される昨今ですが、本データベースは、木簡の調査研究に関する長年の蓄積と、報告書を1冊1冊めくるという地道でかつ不斷の作業、そして何よりも各地の調査機関の方々との長年にわたる密接な連携の成果物といえます。私たちは今後も、全国の木簡研究センターとしての機能を果たしていきたいと考えています。そのときの全国にむけた情報発信手段の一つとして、研究所が公開している、木簡に関する3つのデータベースが、それぞれの特徴を活かしつつ、十分に活用されることを願っています。

（平城宮跡発掘調査部 山本 崇）